(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	当院における小児疾患に対する訪問リハビリの取り組み
演者名	横田久孝、佐藤深雪、平林大輔、及川裕之、佐藤尚久、中田隆文
所属	須藤内科クリニック リハビリテーション科

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		5

【背景と目的】周産期医療の進歩で出産時死亡率が低くなった結果、医療ケアの必要な重症児は増加傾向にある。重症児の長期療養例では在宅療養となる事例もあり、訪問リハが処方される場合がある。当院では在宅の呼吸障害者への訪問リハを行っているが、今回は小児領域の訪問リハについて調査し、訪問リハの役割を検討する。

【方法】平成 17 年 10 月から平成 26 年 10 月までに当院より訪問リハを実施した小児疾患患者 14 名を対象とした。調査は、訪問リハ記録より後方視的に 1) 診断名、2) 開始年齢と性別、3) 医師指示内容、4) 本人、家族の希望、5) 訪問頻度、6) 訪問リハの経過について調査した。本研究は当院の倫理審査にて承認されている。

【結果】1) 脳性麻痺 4 例、免疫不全症候群 2 例、脊髄損傷 2 例、その他 6 例、11/14 例が呼吸不全例。TPPV6 例。2) リハ開始時は平均 19.5 (1~43) 歳、男性 9 例、女性 5 例。3) 呼吸リハ、身体機能維持、生活指導、療養相談など。4) 在宅生活の継続、体調の安定。5) 平均 2~3 回/週で、症状に応じて最大週 5 回の訪問。6) 経過中に 2 例永眠、9/14 例は訪問リハを継続。

【考察】当院の小児領域の訪問リハは呼吸不全例が多く、約半数は人工呼吸器を装着していた。医師の指示は呼吸リハが多く、訪問頻度は状況に応じて計画されていたが、無気肺などの急変時は集中的な呼吸リハの実施のため最大で週 5 日間、訪問していた。定期的な訪問による呼吸リハにて在宅生活が継続できた例があった。さらに薬物療法、呼吸療法、呼吸リハにて無気肺や肺炎を改善できた事例もあり、呼吸リハは呼吸管理の必要な重症児の在宅療養に有意義であった可能性がある。在宅における重症児は呼吸管理の必要性が高く、今後、訪問リハに対するニーズが高まる可能性がある。

【COI】特になし。